回　　答：黒川　理樹（口生化）

グルココルチコイド・レセプターは，高塩処理や加温処理によって，DNA-cellulose やクロマチン，核などに対する結合が増加する。これは，グルココルチコイド・レセプターに一般的に知られている現象であり，本研究では，DNA-cellulose に対する親和性の増加を指標にして，活性化の程度を調べた。

演題16. 沢内村におけるねたきり老人歯科在宅訪問

○横沢　茂樹，谷藤　全功

沢内病院歯科

今回，我々は沢内村において59年度から60年度にわたって，ねたきり老人の家庭を訪問し，意識調査，口腔内検診，歯科衛生指導を行い，又希望者には訪問診療を行ったので，その概要と訪問診療の在り方，問題点についてここに報告した。診療システムとしては，我々はあらかじめ対象者について医師，歯科医師，担当保健婦，歯科衛生士で協議し，1回目は，意識調査口腔内検診，歯科衛生指導を行った。2回目以降は，本人，家族の同意があった場合に，訪問診療を行った。対象例は男性11例，女性27例の計38例で女性が多く，年令別では80～89歳台が男女共に最も多かった。疾患別分類では，男女共に脳血管障害が最も多く，女性では次にリウマチ神経痛，老衰の順であった。又，日常生活動作能力をみる全身評価（ＡＤＬ分類）では，男女共に，比較的，軽度の者が多かった。口腔内状態では，被検者数に対する一人平均残存歯数は，男性 6.3本，女性 1.4本，又，有歯顎者数に対するそれは，男性13.8本，女性 5.3本であった。有床義歯所有者率は男性82％，女性81％であった。義歯所有者の咀嚼状態（術者の判定）は，良好，普通合わせて男性55％，女性82％で女性が高い割合を示した。歯科治療に対する希望は，意志不能者を含め現状のままでよいが，21例と最も多く，以下義歯製作修理11例，鎮痛処置4例，抜歯3例であった。一般にねたきり老人は，咀嚼能力が低下しており食生活に関しては，制限されているのが実情である。今後は現在の成人歯科保健活動の中で積極的に歯科衛生指導，治療を進めていく必要があり，又ねたきり老人に対しても，時間的物理的な制約があるにしても可能な限りアプローチすべきであると思う。このような歯科保健活動は直診病院として，本来果すべき役割であり，それを確立推進していくには病院側，保健婦，行政側の積極的な協力体制が必要である。我々は今後もこの活動を継続発展させていきたいと思う。

質　　問：黒田　政文（歯・開業）

実は，来年度から三沢市でも〝ねたきり老人在宅診療〟について実施を予定されていますので次の点についてご教示賜われば幸いです。

1．治療器具について
2．レントゲン撮影ができないのではないだろうか。適確な診断や，根管治療に困らないでしょうか。
3．不採算の部門について，何かよい処理について
4．主治内科医等とのコンタクトの方法について，どのような方法をとられておられますか。
5．抜歯はP_3～P_4ないしC_4に限られたのですか。

回　　答：横沢　茂樹（沢内病院歯科）

対象者は，保健婦と協議し，選択した。

治療は，主治医と連絡を取りあいながら行った。保険請求に関しては，保険に準じて行った。

演題17. 老人口腔検診におけるＣＰＩＴＮを用いた歯周疾患罹患状態の調査

○松丸　健三郎，北田　武夫*

岩手医科大学歯学部保存学第二講座
岩手県歯科医師会老人歯科保健委員会*

昭和57年に老人保健法が施行され，モデル県の岩手県も歯科疾患の実態調査を岩手県歯科医師会老人歯科保健委員会が中心になり，県内の各地区の歯科健康診査をおこない，その結果を調査報告書として発表してきた。今回我々は，昨年実施した歯科健康診査のうち，歯周疾患の罹患状態についてＣＰＩＴＮを用いて県内の5地区の歯周疾患の有病状態及び重症度の把握を試みたので報告する。

調査地区は，県内の5地区（沢内：40～69歳，162人，衣川：40～80歳，85人，千厩：50～80歳，123人，田野畑：40～80歳，101人，安代：30～69歳，48人）で，検診に応じた519人を調査対象にした。診査は各地区の診療所歯科医師1名の検者により，歯鏡とWHO Periodonta lexamina tionprobe を用い，6分画した口腔の各代表歯である$\underline{76|}$，$\underline{1|}$，$\underline{|67}$，$\overline{76|}$，$\overline{|1}$，$\overline{|67}$を検査対象歯とし，ポケットの深さ，歯肉縁上，縁下歯石の有無を診査した。分画内に検査対象歯がないか，もしくは1本だけ残っていても，隣接部位に含め

る必要がない場合は，機能喪失分画として扱った。記録されたコードの最高値を有所見コードとして有病者率を求め，次に各評価コード毎に一人の平均有病分画数を計算した。各々の分析は年齢層別（30～39歳，40～49歳，50～59歳，60～69歳，70歳以上）におこなった。

その結果，(1)歯周組織に何らかの異常が認められた者は40歳以上では93.5%～100%に達した。一人平均の有所見分画数は，70歳未満では口腔の⅙以上の部位に異常が認められた。(2)増齢に伴ない，「出血のみの者」や「歯石の者」という軽度の割合は減少傾向を示し，ポケットのうち「深ポケット」は40～59歳で減少傾向を，60代で増加を示した。これは，「深いポケット」が早い段階で機能喪失にシフトしていくためではないかと思われた。(3)有病者率と一人平均有所見から，機能喪失は，増齢と共に増加傾向を示した。

質　問：片山　剛（口衛生）

各地区の調査は全数調査ですか。

回　答：松丸健三郎（保存2）

検査をうけたものは，サンプリング法でなく，前もって町または村から地域住民に広報で知らせて受診したものです。

質　問：田沢　光正（口衛生）

1．ＣＰＩＴＮで用いるポケット・プローベの使用してみての特徴を教えて欲しい。

2．ＣＰＩＴＮを用いた場合，個人の情報としての有用性はどの程度か。

回　答：松丸健三郎（保存2）

1．従来より使用しているプローベに比較し，やや軽い感じがし，また先端からの目盛りが0.5mmで，以後はコンマ5mmで，はじめは使用しにくい。しかし，慣れてくると，使い易くなるのではないかと思われます。

2．情報の地域住民への還元は，今年9月の調査時には，1人1人にその日の結果を説明している。また，アンケートも同時におこなっている。

演題18．岩手県立中央病院歯科口腔外科における過去10年間の入院患者及び手術症例の臨床統計的観察　—第2報—

○千葉　寛子，大坂　博伸，中里　滋樹，小川　邦明*

岩手県立中央病院歯科口腔外科

小川歯科医院*（都南村開業）

岩手県立中央病院歯科口腔外科において昭和50年4月1日から昭和60年3月31日までの過去10年間に受診した口腔外科疾患患者の臨床統計的観察を行なった。外来において口腔外科的手術を受けた患者は260症例，また入院患者は262症例であり，入院患者のうち観血処置は197例，非観血処置は65例であった。年度別には入院症例が最も多かったのは昭和52年の39例で，外来症例においては昭和58年の37例であった。年齢別では入院患者は10代37例から50代40例までほぼ一定となっており外来患者は20代が最も多かった。月別手術症例では入院症例は季節による変動はみられず一方外来症例は7月が多く12月が少なかった。地域別では盛岡市34%で，以下久慈市5%，滝沢村4%の順であった。入院患者の入院日数は8～14日の92例が最も多く，全体の70%近くが2週間以内で退院していた。疾患別平均入院日数は観血処置例において嚢胞13.6日炎症12.1日，外傷31.1日，悪性腫瘍158.2日で非観血処置例では炎症の非特異性炎が16.4日，特異性炎は放線菌症の1例のみで8日であった。疾患別内訳は入院症例で嚢胞77例（29.4%）炎症65例（24.8%）腫瘍41例（良性25：悪性16）外来症例で埋伏智歯や正中過剰歯などの歯の異常104例（40.0%）嚢胞60例（23.0%）などであった。手術症例を内容別にみると，嚢胞は顎骨内においては術後性頬部嚢胞などの嚢胞摘出術が78例，軟組織では粘液嚢胞やがて腫に対するクライオサージェリーが14例みられた。炎症は，歯性感染による非特異性炎が多数で抜歯と掻爬を兼ねた処置が22例であった。歯の異常は智歯抜歯が90例と圧倒的に多かった。良性腫瘍は45例で非歯系腫瘍が多く，歯系腫瘍は歯牙腫の2例のみであった。悪性腫瘍は16例で同一患者における重複手術が行なわれている場合もあり，切除術やカニュレーションが主であった。

質　問：片山　剛（口衛生）

1．常勤2名の歯科医で年間10症例の手術，外来診療で大変多忙と思われますが，

2．中央病院を受診する患者（入院症例など）の受診経路はどの様なものか。

回　答：千葉　寛子（県中病・歯・口外）

1．歯科口腔外科における診療スタッフはDrが2名，歯科衛生士2名で行なっていますので，外来診療入院病棟と毎日かなり忙しいのが実情です。

2．来院経路は，他の県立病院からの紹介，市内開業医からの紹介の他に院内（他科）からの紹介が多数